

わが心の自叙伝

菅原洋一

.....▷7

先週は、なかにし礼さんの訃報にふれ感謝の言葉を述べたが、今週からまた私の人生を順を追って振り返ってみよう。まだ歌手になる前、国立音楽大学に通い始めた頃にタイムスリップだ。

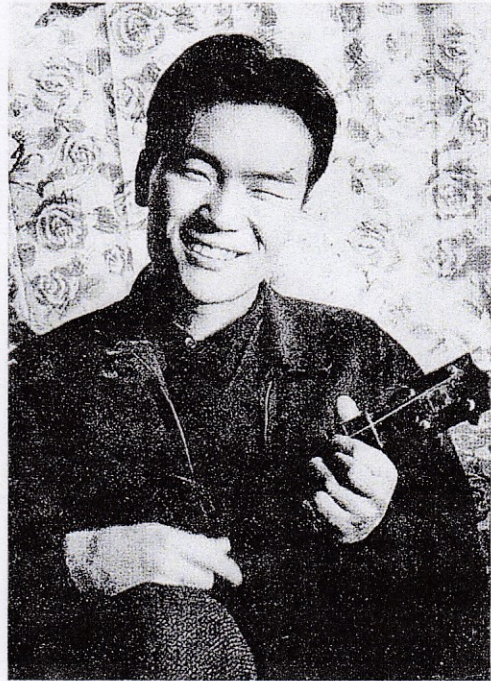
当時の私の下宿は東京の高円寺という場所にあった。風呂なしトイレ共同、家賃3,500円。食事はついてないから毎日が外食。しかし仕送りは7千円だった。切り詰めなければならぬ。当時はまだ外食券食堂というのがあった。そこへ米穀通帳というものを持って行くと、ご飯が食べられた。通帳の半券一枚で、飯一膳。コロッケが5円でよくそれを食べていた。

だがちよつと贅沢でもしようものなら、たちまち仕送りの金だけではニッチモサッチモいかなくなる。そんなときは親に「どうしても欲しい楽譜がある」な

懐かしい学生時代

どと言って、お金を無心した。だが送られてきたお金はすぐに食費に消えた。東京に少しづつ慣れ、友達ができると、やはりお金はかさむ。何回も「欲しい楽譜」が通用するはずもなく私はアルバイトを始めた。

音大生のアルバイト先だから当然、音楽に関するものである。ただ当時の音楽学校というものは実に厳しく、学校で学んでいるクラシックやオペラ以外の音楽を外で、ましてアルバイトで歌っていることがもし見つかってもしたら退学も免れない。歌謡曲や軽音楽などもっての外だった。



大学時代の筆者

昭和初期のことだが、レコード歌手になれるのは、音楽を学んでいる音大卒業生や学生に限られていた。しかしクラシックの世界からは、どうもそのほかの音楽を低俗視していた。

淡谷のり子さんは、音大卒業後に歌謡曲を歌い卒業名簿から名前を抹消された。藤山一郎さんは家計を助けるために名前を変えて「酒は涙か溜息か」をア

大歌手に育ってゆくが、戦前戦中戦後と歌い続け、私が学校に入った時期にも歌謡界のトップスターとして君臨していた。デビューしてからもお二人には可愛がられた。昨年発売した私のアルバムには淡谷さんの「白樺の小径」や藤山さんの「長崎の鐘」をレコーディングさせていたのだ。

そんな先輩たちの学校時代のアルバイトの話は、私たちの時代になってもまことしやかに語り続けられていた。だが食わないわけにはいかない。最初にやったバイトは、先輩に連れられ立川の米軍基地で歌ったジャズソング。このときはお金にはならなかったけれど、珍しいアメリカ産の缶詰をもらって腹を満たした。

そのあともコーラスに参加したり、キャバレーでギターを弾いたりして何とか食いつないだ。懐かしい青春の刻である。(すがわら・よういち「歌手」)

バイトで歌って食いつなぐ